

# 第8回 建コンフォト大賞

あなたのお気に入りの“土木施設”

当協会では、広く一般の方々の土木施設への興味を高め、建設コンサルタントをより知っていただくために、平成21年度よりフォトコンテスト「建コンフォト大賞」を毎年開催しています。「あなたのお気に入りの“土木施設”」をテーマに、道路や橋、鉄道、上下水道、空港や港、公園や堤防など、私たちの日常生活を支える土木施設のある風景を撮影していただきました。

平成28年度も、当協会ホームページやフォトコンテストに関する情報提供サイトへの掲載、全国の公共図書館や高校写真部へのポスター配布などで作品を募りました。その結果、全国の幅広い年齢層の方々から288点の応募をいただきました。

## 審査方法

ご応募いただいた作品は、審査委員（4名）および当協会広報事業専門委員会による審査会にて審査しました。

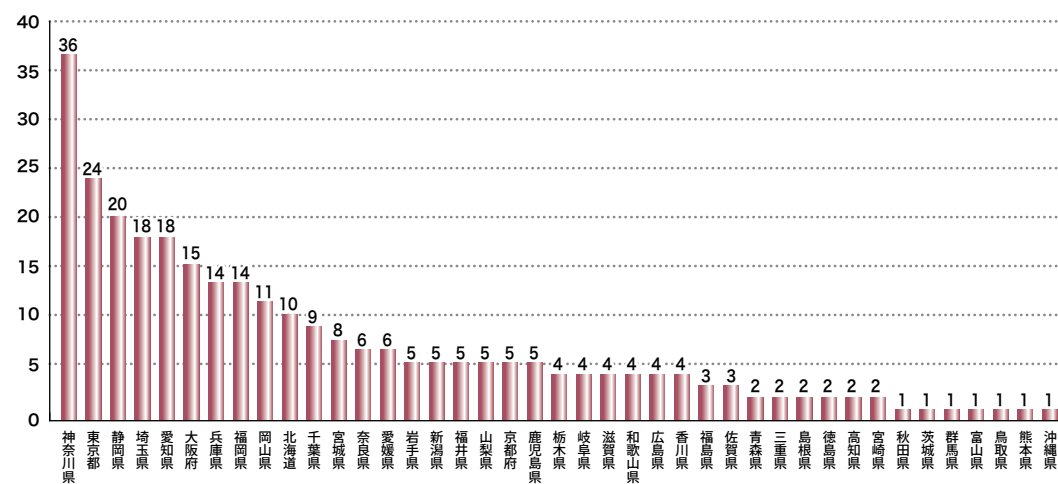
## 審査結果

最優秀賞1点、優秀賞2点、特別賞10点を決定しました。  
入賞作品と講評は次ページ以降に掲載するとおりです。

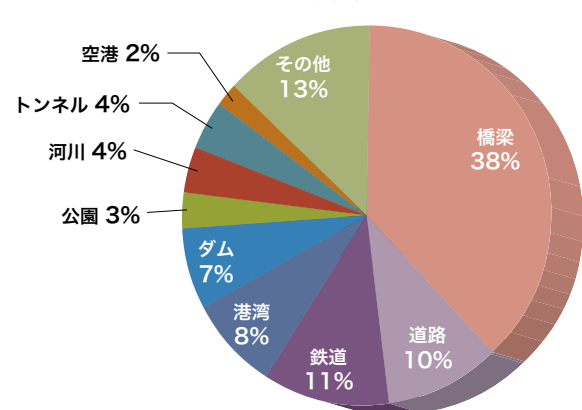
## 審査委員

|         |                           |
|---------|---------------------------|
| 審査委員長代理 | 宇於崎 勝也（日本大学准教授）           |
|         | 知野 泰明（日本大学准教授）            |
|         | 初芝 成應（日本写真作家協会員）          |
|         | 村田 和夫（建設コンサルタンツ協会広報戦略委員長） |

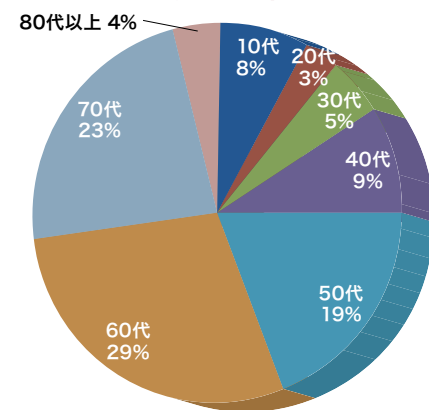
## 地域別の応募者



## 写真撮影の対象



## 応募者の年代



## 最優秀賞



## 「水田鏡」

岡山県 横田 直  
(撮影地：岡山県倉敷市)

## 【撮影者のコメント】

一年に一度だけ現れる田植え直後の水田鏡。  
この日は美しいひつじ雲の中を飛んで行くようにも見える井原鉄道をとらえることができました。

## 講評

鏡のように鉄道と空を映しているのは田植え直後の水田である。井原鉄道は1時間に1～2本を運行する第三セクター経営の路線であり、絶妙のタイミングで流れる雲と水田の間に電車をとらえた。美しさとともに動きを感じさせる1枚。(宇於崎審査委員)

早苗とともに張られた水が鏡となつて、<sup>まんたら</sup>曼荼羅の世界を碧く映し出しているかのようです。斑模様の雲の中を走り抜ける汽車の姿が、まるで童話の挿絵を思わせます。(知野審査委員)

美しい水田に写り出された鉄道橋に、一両電車が走る姿は水田鏡ならぬ、まるで万華鏡の如く、おとぎの国から来た可愛い一両電車を想わせる、見た人を楽しませる可愛い見事な作品です。(初芝審査委員)

幻想的な風景である。左に向かって広がって動いて行くように見える雲と、右に向かって走っているように見える電車との動きの対比が空間を広げている。(村田審査委員)





## 「紺碧の空に」

神奈川県 野村 成次  
(撮影地：神奈川県川崎市)

### 【撮影者のコメント】

自宅近くの鉄塔に作業の人が登っていた。点検でもしているのかと、地上にいた人に聞けば、鉄塔も送電線も撤去するための準備とか。今年6月中旬のこと。1カ月後には、撤去されてしまった。なくなって、淋しくなった。毎日見ていたものが消えて、その役割に思いをよせていた。御苦労さまでした。

### 講 評

はじめはこのような地道な点検作業が送電の安全確保に欠かせないことと思っていたが、撮影者によるコメントでは鉄塔と送電線を撤去する準備を行っている様子をとらえたものであるという。しかし、人が土木施設を支える基本であることは間違いない。  
(宇於崎審査委員)

普段であれば高圧電流が流れる送電線にて命を懸けて働く人々。まさに男の勇気が青空に輝きます。

(知野審査委員)

送電線の撤去作業中をとらえた、題名の如く紺碧の空に電線撤去作業をする、その厳しい命がけの仕事が伝わる。しかし紺碧の青空は危険で困難な作業を打ち消し、美しく逞しい作品になっている。

(初芝審査委員)

送電線・鉄塔の撤去準備の作業とのことである。澄み切った青空の中、命綱をつけた高所作業中の人達がメインである。テーマは土木施設であるが、主役はそれらを建設・運用・管理する人間であることが分かる。

(村田審査委員)



## 「七変化を演出」

新潟県 山田 勲  
(撮影地：新潟県新潟市)

### 【撮影者のコメント】

何の変哲もない防波堤ですが、年間を通じて波の「七変化」を演出してくれます。この日は梅雨明け前で少々波が高いといった特に変わった天候ではありませんでしたが、時折、想像もつかないような波の姿を見せてくれました。天候にかかわらず、いつ見ても何回見ても飽きることがないのは、防波堤をほぼ真横から見られるのも一因です。私たちを守ってくれるだけでなく、自然の不思議さを感じさせてくれる防波堤に感謝しています。

### 講 評

日本海に面する間瀬漁港の堤防をとらえている。高く巻き上がる波からは消波ブロックに激しく打ちつける荒波が想像され、よくぞこの一瞬をとらえたと感心する。撮影者が「七変化」と名付けている、その他の様子も見てみたい。  
(宇於崎審査委員)

円筒形に立ち昇る波しぶき。激浪から港を守る土木構造物のチームワークが生み出した造形とは驚きました。方円の器に従うはずの海水が、自立して形を成した一瞬です。

(知野審査委員)

作者は見えて飽きる事の無い自然の織り成す波の一瞬をとらえており、あたかも海に向かって砂をまいているが如く見え、相当辛抱つく待たねば、この様な芸術的な波状をとらえるのは至難の見事な作品です。

(初芝審査委員)

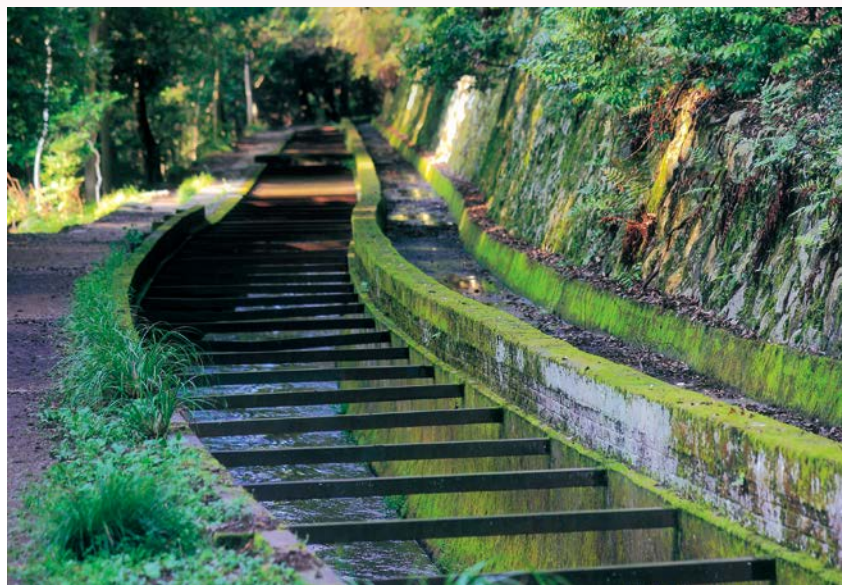
堤防内外の穏やかそうに見える水面。それと対照的に勢いのある水柱が映っている。一見穏やかに見えても、激しい水しぶきを上げる外海のエネルギー。その力を堤防が緩和し、港を守っている。

(村田審査委員)





## 特別賞



### 「水路閣への道」

京都府 井上 弘一

(撮影地：京都府京都市)

#### 【撮影者のコメント】

琵琶湖第一疏水により京都市の蹴上まできた水は南禅寺船溜り（インクライン）や蹴上発電所などに送られ、また水力利用、かんがい用水、防火用水として利用するために疏水分線として開削された小さな水路を北に向かって流れていきます。発電所を過ぎ、南禅寺境内の水路閣までの小径はいまも静寂を保ち、この先にある「哲学の道」よりもゆったりと散策を楽しむことができます。作られた明治中期の頃そのままの姿が残されていて好ましい。

#### 講 評

今にもコケや水のおいが漂うような明治から続く光景は、今日なお重要なインフラの証でもあり、地域の憩いの場としての静寂感が感じられる。琵琶湖疏水の南禅寺水路閣に続く小径の水路が優雅な水の流れをたたえている清々しさもある。



## 特別賞



### 「提灯灯台に見守られ」

神奈川県 小澤 宏

(撮影地：神奈川県小田原市)

#### 【撮影者のコメント】

朝焼けに染まる中、港を出る定置網漁船。見送るように舞うカモメの群れ、そしてそれらを見守る小田原提灯の形をした灯台。感動の光景でした。

#### 講 評

朝焼けの中で出港する漁船と取り巻くような鳥の群れ、写真の中に大いに躍動感が感じられる。小田原港の灯台は小田原提灯の形を模しており、灯台本来の目的のほかに、小田原らしさを感じさせる地域のシンボルともなっている。



### 「オアシス」

神奈川県 谷口 常雄

(撮影地：鹿児島県熊毛郡屋久島)

#### 【撮影者のコメント】

このコンクリートの物体は屋久島の海底に沈めた漁礁です。漁礁は魚たち生物が生きて行く為の隠れ家になります。漁礁は長い年月海中で時を刻み表面は硬いサンゴに覆われていますが、それは美しい自然の色彩となります。漁礁のまわりでは弱い魚は群れを成し、大きな敵が来ると漁礁の中に逃げて身を守ります。撮影時この時のハタタテの群れは大変美しかったです。そしてここは沢山の魚が集まる「オアシス」になります。

#### 講 評

海中のコンクリート漁礁は、完全に周囲の海底環境に同化し、漁礁に棲みつく真っ赤な巨大魚と、気品を漂わせ背びれを立てて泳ぐ魚群と、対照的に捉えた美しい海底模様です。



### 「暮らしと伝統」

愛知県 佐藤 孝夫

(撮影地：愛知県海部郡蟹江町)

#### 【撮影者のコメント】

蟹江川に架かる御葭橋<sup>みよしはし</sup>は、日常は地域の人々の生活を支える橋ですが、須成祭の宵祭と朝祭の年2回だけ稼働する橋です。背の高い車楽船<sup>だんじりぶね</sup>は、橋をくぐることはできないため、右岸側の橋半分が跳ね上がる構造です。船舶の往来のために可動する橋は他にもあるかと思いますが、祭りの為だけに建設されたのは、ここだけではないかと思われます。なお、橋の名前「御葭橋」は、祭礼にちなんで付けられました。

#### 講 評

祭りで川面を移動する「車楽船」の高さが半端ではなく、やはりこの跳ね橋を設計するに際し、地域に暮らす人々の伝統文化を重んじる心が、片跳ね橋を見て一目で分かります。



## 特別賞



### 「迫力の放流見学」

神奈川県 越智 秀史

(撮影地：神奈川県愛甲郡愛川町)

#### 【撮影者のコメント】

神奈川県にある宮ヶ瀬ダムでは、地元地域振興や児童の社会科授業の一環として「観光放流」というイベントが、年間70日（各日2回）程度開催されています。高低差70mの場所にある2門の常用洪水吐から、毎秒30立方メートルもの水が放流される様子はものすごい迫力で、放流が行われる6分間は見学者の目が釘付けになってしまいます。

#### 講 評

五月晴れの中、授業の一環でダムを見学している多くの小学生達が感動して放流を見上げている。一人でも多くの子供達が土木施設に関心を持ち、社会資本整備の担い手になって欲しい。



### 「復興海岸」

東京都 青木 伸雄

(撮影地：福島県いわき市)

#### 【撮影者のコメント】

津波被害にあったいわきの海岸が、防波堤で仕切られようとしています。道路から海が見えなくなり、実家が近く幼い頃よく遊んでいたので少々複雑な気持ちです。塩屋崎灯台より眼下をのぞんで。

#### 講 評

塩屋崎灯台から眼下を望み、津波によって変わり果てた故郷を見た撮影者の心境は如何ばかりであろうか。立派な防波堤はできたものの、これもまた記憶の中の海岸とは違ったものであるうが、これからはお気に入りの土木施設として地域で育てて欲しい。

## 特別賞



### 「華咲く旭橋」

北海道 半田 菜摘

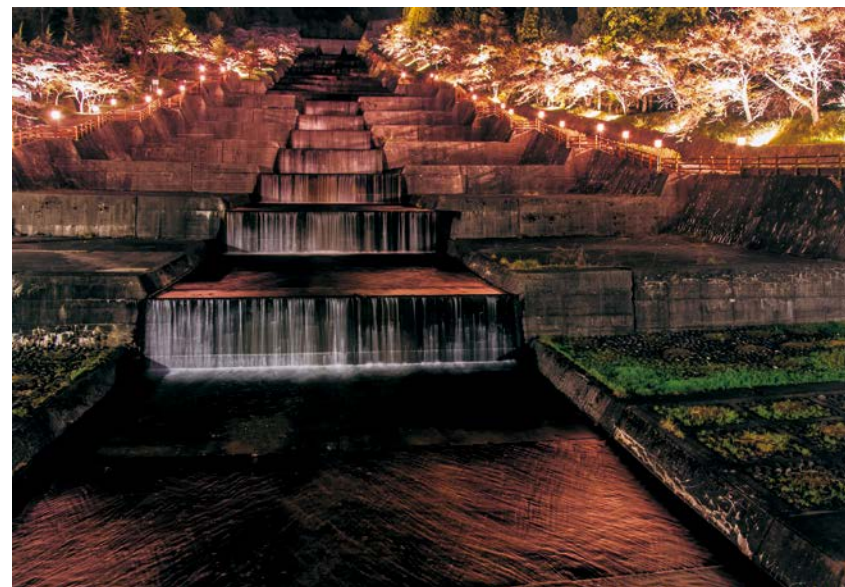
(撮影地：北海道旭川市)

#### 【撮影者のコメント】

地元らしい夏の風情を撮影したいと考えた時に、初めに思い浮かんだのが旭川市のシンボルである旭橋でした。北海道遺産にも登録されている旭橋は、市の中心部と北部を結ぶ重要な役割があるとともに、河川敷では「雪まつり」や「花火大会」など旭川を代表するイベント会場として市民に愛され、活気溢れる場でもあります。今回は旭橋と花火大会を撮影しましたが、花火大会のハデさに劣らない、重厚で美しいアーチの旭橋は存在感があり誇らしげに感じました。旭橋の存在は、より一層花火大会を盛り上げてくれました。

#### 講 評

ブレースト・リブ・バランスド・カンチレバー・タイドアーチと呼ばれる歴史的な形式の橋が、お祭りで祝福されているかのようです。華やぐ大輪を背に時代を超えた土木施設が夜空に浮び上りました。



### 「漆黒に浮かぶ」

神奈川県 岡本 芳隆

(撮影地：岐阜県高山市)

#### 【撮影者のコメント】

1979年8月に岐阜県高山市奥飛騨温泉郷の中心に位置する洞谷で大規模な土石流災害が発生し甚大な被害をもたらしました。37年の歳月が過ぎた現在、被害の再発を防ぐために流路工が整備されています。また、数百本の桜の木が植えられ復興の証として桜祭が開催されています。無機質なコンクリートの流路工ですがライトアップされた桜との変わった空間が面白く想い撮影しました。

#### 講 評

階段を滑り降りる水流。土砂の流下を防ぐ施設が重厚な滝となって夜景の中で存在感を出しています。



# 特別賞



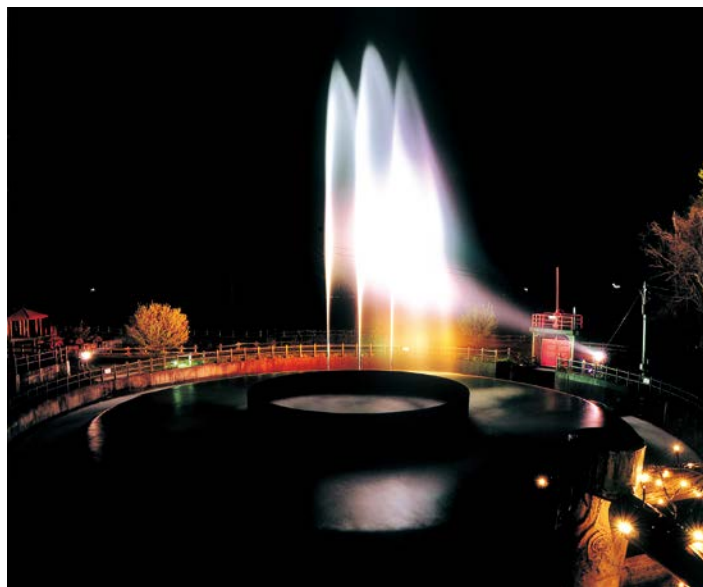
「点検作業」  
東京都 大久保 辰朗  
(撮影地：東京都港区)

## 【撮影者のコメント】

東京のシンボリック存在のレインボーブリッジは、四季を通して様々な顔を見せてくれる。薄曇りの夕暮れ前に出掛けた日、ハシゴ車に乗って点検作業をしている場面に出くわした。作業員の位置を見極めながらシャッターを切った。透明感のある秋の空気を感じた1枚が撮れた。

## 講評

これから必要性を増してくる点検・維持管理を対象にした写真は珍しい。写真中央に点検作業を入れる工夫が見られる。



「神秘の水柱」  
岩手県 達下 才子  
(撮影地：岩手県奥州市)

## 【撮影者のコメント】

平成25年に全国最大級規模のロックフィル式ダム「胆沢ダム」が完成した。その完成を祝い、円筒分水工に24mの3本の噴水がお花見の季節限定で上がりました。夜にはライトアップされ、それはそれは神秘的な美しさでした。毎晩のように通って撮影した1枚です。

## 講評

吹き上がる3本の水がライトに照らされ、幻想的な光景となりました。丸い水のステージは円筒分水堰と呼ばれるもので、水を等しく分けたいと考え出されたかんがい施設です。

# 【入賞作品マップ】

